

「リアルからの搾取、そして解放をとりまく  
環境について」

○ 梗概

大貫陽菜子（21）は、登録者2万を超えるメタバース「リアルからの解放」の創設者で、女子大生。

感染症が流行する中、ある日突然、母親の晴世（51）が家出をしてしまう。父親の陽一（54）は陽菜子に何かを隠していて、弟の幸太郎（17）は無関心。祖母の陽子（78）は、晴世を責める始末。陽菜子も含めて、これまで晴世のことを家政婦として扱い、大事にしてこなかったせいで、こんなことになってしまった。

陽菜子は、母が家にいるという「当たり前」を失い、メタバースどころではなくなってしまう。晴世は両親をすでに亡くし、兄弟もいないため行くあてがない。「家事しかしないから必要ない」と陽一は晴世にスマホを与えなかったため、手がかりもない。

陽一は、早々に家政婦の井上マリア（34）を雇い、晴世のいない「家」を完成させよう

とする。陽菜子は、そんな陽一と喧嘩を繰り返す。二人の仲が悪いのは、陽一は旅行代理店に勤務していて、上司がメタバース（陽菜子の才能）に関心をよせていることも気に入らない。

マリアは、一人部屋に閉じこもる陽菜子を心配し、夜食を持っていくと、陽菜子は晴世に対して酷いことを言い、翌日、晴世が家出したことを告白して泣く。

陽菜子は、陽一に黙ってTwitterで母親を探しているツイートをしてバズり、二人は大ゲンカ。ついに、陽菜子は家を飛び出してしまふ。陽菜子は、晴世が通っていたショッピングモールに向かう。メタバースの仲間達とも喧嘩別れし、一人で無人のショッピングモールの彷徨う中、晴世と再会。

晴世は、陽菜子のことを怖がるが、陽菜子は晴世に謝り、家に帰りたいがらない晴世を連れて、どこかへ二人で逃げようと決めて物語は終わる。

○ 登場人物

- 大貫陽菜子（21） 大学生
- 大貫晴世（51） 陽菜子の母親
- 大貫陽一（54） 陽菜子の父親（会社員）
- 大貫幸太郎（17） 陽菜子の弟（高校生）
- 大貫陽子（78） 陽菜子の祖母
- 白井和幸（62） 陽一の会社の役員
- 井上マリア（34） 家政婦
- 瀬名愛莉（27） （アバター）テレビ局の  
アナウンサー
- メタバースの住人たち（アバター）
- 陽一の部下たち（リモート会議出席）

○陽菜子の自宅・全景

2階建ての一軒家。

瀬名愛莉の声「今、話題のメタバース「リアルからの解放」の創設者、ヒナさんです。

こんにちは」

○同・2階（陽菜子の部屋）

大貫陽菜子（21）、VRのヘッドセットをつけ、両手にリモコンを持って操作している。

デスクトップモニターに映るメタバースの世界（昭和30年の日本橋の町）

陽菜子「こんにちは」

愛莉の声「ヒナさんは、都内の大学に通う女子大生だそうですね」

陽菜子「はい。そうです」

○メタバースの世界

陽菜子に似せたアバターが日本橋の大通りに立っている。

そばに瀬名愛莉（27）に似せたアバタ  
ーが、テレビ局のマークがついたマイ  
クをもって立っている。

愛莉「平成生まれのヒナさんが、どうして昭和30年の日本橋を再現できたんですか？」

陽菜子の声「はい。祖母が昔住んでた町で、その頃の写真が家にたくさんあったんです」

愛莉「そうなんですね。撮影されたのはおばあ様ですか？」

陽菜子「はい、そうです。カメラが好きで、将来はカメラマンになるのが夢でした。でも高校生の時、足が不自由になってしまった」

愛莉「それで、この世界をおばあ様のために作られたんですね」

陽菜子「はい。メタバースの世界で、おばあちゃんに自由に歩き回ってほしかったんです」

愛莉「おばあちゃん思いの良いお孫さんですね。でも、どうしても一般にも公開しようと

思ったんですか？」

陽菜子「おばあちゃんの話し相手になつてくれる仲間が欲しかったので」

愛莉「なるほど。そうしたら、登録者が2万人を超えてしまったわけですね」

陽菜子「はい。いつの間にか、当初の目的とは違うコミュニティになっていました」

愛莉「では途中から、「リアルからの解放」になつたんですね？」

陽菜子「そうなんです」

街中には、企業の広告看板が並ぶ。

\* 広告は現在、最新のもの。

愛莉「スポンサーもこんなにたくさん」

陽菜子「はい。ありがとうございます」

### ○ 陽菜子の部屋

高額なゲーミングPCやモニター。

部屋の棚に並ぶブランドもののバッグなど高級品。対照的に、本棚には古い写真アルバム（日本橋）が並ぶ。

○メタバースの世界

愛莉「驚くのは、YSJ、日本最大手の旅行代理店です。こういう世界とは真逆のように思えるんですが」

○2階の廊下

陽菜子の部屋から陽菜子やりポーターの声がする中、陽菜子の隣の部屋。

○大貫の部屋

大貫陽一（54）スーツ姿で床にマットを敷き、革靴を履いている。

スーツの胸には、【YSJ】のバッジ。【本店第一営業部部长】の文字が。

大貫、苛立った顔でデスクトップモニターの陽菜子と愛莉のやり取りを観ながら、爪を噛み、貧乏ゆすりしている。

陽菜子の声「そうですね。確かに真逆かも」

○メタバースの世界



他のアバターも歩いていて、陽菜子のアバターを見つけると集まってくる。

愛莉「企業とのコラボレーションで毎日のようにイベントをやられたり、先週は有名なアーティストのライブもされたそうですね」  
陽菜子「はい。そこは、プロのイベント会社さんとタイアップして進めてもらっています。私は、この世界を楽しいものにしたいだけなので」

陽菜子の周りに、たくさんのアバターが集まっている。

愛莉「みなさん。どうですかこの世界は？」  
アバターたち「（口々に）最高です」  
アバター1「私なんか、ほぼ1日中いますよ。必ず、誰か仲間がいるんで」

アバター2「この世界は、男子も女子も、年齢も学歴も関係ありません。リアルから搾取されて傷ついた人達が集まってくるんです」

愛莉「リアルから搾取？面白い表現ですね」

陽菜子「はい。現実では辛いことばかりだから、この世界ではそういうことがない世界にしたかったです。誰からも傷つけられないことがない楽しい世界に」

愛莉「ヒナさん。まだ女子大生ですよね？」

陽菜子「年齢は関係ないと思います」

愛莉「失礼しました。でも、一般公開ということは何でも入れるんじゃない？」

アバター3「酷いこと言う奴は、Aーがつつかまえて追い出してくれるんで」

陽菜子たちの輪にすると近づいてくるアバター4。

アバター4「何が「リアルからの解放」だ。

こんな世界まやかした。バカかお前らは。ただ現実から逃げてるだけじゃねえか」

機械音「NGワード発見。アバターを消去します」

アバター4が消える。他のアバターたち、ハイタッチで喜びを分かち合う。

愛莉「まさか目の前で見るなんて驚きです」

陽菜子「ヒトを傷つける言葉はすべて消去の対象になります」

愛莉「水を差すわけじゃないんですが、逆に息苦しくなったりしませんか？」

アバター1「全然。ほんと、ヒナさんが作ってくれたココは、まさに完全で完璧な世界です」

愛莉「完全で完璧な世界ですか。皆さんにとってヒナさんはどんな存在ですか？」

アバターたち「（口々に）メシア」

晴世の声「お義母様、お義母様、もう中継つな갑니다」

### ○1階・祖母の部屋

大貫陽子（78）介護用ベッドで上半身を起こし、VRのヘッドセットをはめ、リモコンをもっている。

傍らに大貫晴世（51）。

陽子「うるさいわね。犬みたいに呼ばないでちょうだい。ほんとに無礼な人ね。あなた

は」

晴世「も、申し訳ございません」

愛莉の声「ヒナさんのおばあ様」

陽子「はい」

愛莉の声「こんにちは」

陽子「こんにちは」

晴世、伏目がちに陽子を見ている。

部屋のサイドテーブルには、陽菜子と

陽子の映った写真が飾らされており、

それ以外にも幼少期の陽菜子が陽子の

ために描いた絵など、たくさんの陽菜

子と陽子の絆を示す痕跡が並んでいる。

### ○陽菜子の部屋（朝）

T・「翌朝」

陽菜子、慌てて朝の支度をしている。

陽菜子「ヤバい。遅刻するう」

陽菜子、部屋を飛び出す。

### ○1階の玄関（朝）

大貫幸太郎（二） 高校の制服を着て、  
寝ぼけまなこで靴を履いている。

晴世、光太郎の背中を見ている。その  
手には靴磨きを持っている。

陽菜子、階段を駆け下りてくる。

陽菜子「遅れる、遅れる」

晴世「おはよう。ヒナ」

陽菜子、光太郎の背中を蹴飛ばし、

陽菜子「早くしろ。バカっ」

晴世「陽菜子」

光太郎、欠伸をしながらのぼーっと立  
ち上がる。顔に、鼻出し状態のマスク。

晴世「いってらっしゃい。光太郎、ちゃんと  
鼻かくして」

陽菜子、慌てて靴を履きはじめる。

光太郎、玄関ドアを開けて出ていく。

陽菜子「あのゴミ、マジ邪魔」

陽菜子、靴を履くと立ち上がる。

晴世「あ、マスクマスク」

陽菜子「いらぬ。コンビニで買う」

晴世「もったいないわよ。ちょっと待って」

晴世、振り返ってリビングの方へ行くこととする。

陽菜子「いいから」

晴世「もったいないわよ」

陽菜子「ああ。もう、うるさいなあ。ウザいんだよバカ」

陽菜子、玄関ドアを開けて出ていく。

晴世「あ、ヒナ…」

ドアが閉まる。

晴世、力なく両手をおろす。

大貫、スーツ姿で階段を下りてくる。

大貫「おい。靴は磨き終わったのか？」

晴世「あ、すいません。すぐ」

大貫「グズグズするなバカ」

晴世「申し訳ございません」

晴世、三和土に出ている大貫の靴を磨こうと腰をかがめた時、痛みに顔をしかめ、腰に手を当てる。しゃがもうとする動きがスローモーションになる。

大貫「何してんだ。早くしろ。もうすぐ仕事  
がはじまるんだぞ」

晴世「も、申し訳ございません」

晴世、早く動こうとするができない。

陽子の部屋から、陽子の声。

陽子「晴世さん：晴世さん」

晴世「あ、どうしよう」

大貫、腕組みして何も言わない。

陽子の声「何してるの。早く来なさい」

晴世「はい。申し訳ございません」

晴世、腰を折ったまま大貫を見上げ、

晴世「少し、行ってきたも：あの：」

大貫、目を合わせようとしない。

陽子の声「晴世さん」

晴世「す、すいません」

大貫、あからさまな舌打ち。

晴世、腰を屈めて陽子の部屋へ向かう。

大貫、階段をあがっていく。

陽子の声「まあ、そんな汚い手で私の部屋に  
入らないでちょうだい」

誰もいない玄関。

陽菜子M「こんな毎日が、これからも続くと  
思いこんでた」

○同（夕方）

陽菜子、帰ってくる。

陽菜子「おかあさーん。やっぱり、明日からリ  
モートだって。リモート」

反応がない。

陽菜子「おかあさーん。大学の授業リモート」  
陽子の声「ヒナちゃん。ヒナ：ヒナ」

陽菜子、不思議な顔をして靴を脱ぎ、

陽子の部屋へ。

○陽子の部屋（夕方）

陽子「晴世さん。帰ってきてないんだよ」

陽菜子「え？え？」

陽菜子、意味が理解できない顔。

陽菜子M「夕方、母が家にいない。それだけ  
でフリーズしてる自分がいた。母が家にい



る。それがあまりにも当たり前のことだったから」

大貫「おい。陽菜子」

大貫、部屋の入口に立つ。

大貫「オマエ、ちゃんと消毒したのか」

陽菜子「…」

大貫「自宅の感染が一番多いんだぞ。何度も

言わすなバカ」

陽菜子、大貫を睨むと部屋を出ていく。

大貫「まったく。学習能力のない女だ」

陽子「陽一…晴世さんは？」

大貫「母さんは、気にすることない」

大貫、部屋を出ていく。

○玄関（夕方）

陽菜子、下駄箱の上に並ぶ消毒スプレー

ーを手に取るが、うまくつかめず三和

土に落としてしまう。

大貫、現れる。

陽菜子、スプレーを拾い、掌にかける

と元の場所に戻す。

大貫「オマエ、料理くらいできるんだろ」

陽菜子「母さんは？」

大貫「焼くとか煮るとか、それくらいは」

陽菜子「母さんはどうしたの？」

大貫、何も言わない。

陽菜子、服のポケットからスマホを取り出すと、

陽菜子「警察に電話しなきゃ」

大貫「バカ」

大貫、陽菜子のスマホをはたき落とす。

陽菜子「いたっ。何なの」

大貫「みつともないことするなバカ」

陽菜子「どうして？母さんいないんでしょ」

大貫、顔をそむけて舌打ちする。

陽菜子「誘拐とかかもしれないじゃん」

大貫「誘拐？バカかお前は」

陽菜子、大貫を睨む。

大貫「あんな学もない。手に職もない。何ももってないただの中年女、誘拐してなんの

意味がある」

大貫、振り返っていこうとする。

陽菜子「父さん、なんか知ってるの？」

○大貫の部屋（夜）

テーブルの上に置かれたクシヤクシヤ  
になったメモ。

晴世の声「ごめんなさい。家を出ます」

家を出ますの文字が震えている。

○玄関く階段（夜）

大貫、階段を上っていく。

陽菜子「父さんッ」

大貫「オマエも、料理くらい覚えておけよ。

女のくせに、情けない奴だ」

陽菜子、大貫の背中を睨む。

光太郎、あくびをしながら帰宅。

光太郎「ただいま」

光太郎、玄関に座り靴を脱ぎはじめる。

陽菜子、光太郎の背中を蹴飛ばし、

陽菜子「母さんが出てったの」

光太郎「え？なんで？買い物？」

陽菜子「バカ」

陽菜子、光太郎の頭をはたく。

光太郎、靴を脱ぐと家の中へ。廊下を渡り、階段をのぼる。

陽菜子、光太郎を追いかける。

陽菜子「アンタ、状況わかってんの？」

光太郎「え？じゃあ、飯は？」

陽菜子、光太郎の尻に頭突きをし、

陽菜子「バカ。死ぬ。マジ消えてなくなれ」

○陽菜子の部屋（夜）

陽菜子、風呂上り。ベッドの上で膝を抱えて座っている。

陽菜子M「母さんが帰ってこない」

陽菜子の胸がどきどきと鳴る。

陽菜子M「それだけで、こんなにビビッてる」  
サイドテーブルに置いてあるスマホに  
Twitterのリプライ。

Twitterの公式アカウント「フォロワー50万人突破しました」

○陽菜子のTwitter画面（自己紹介）（夜）

ひな。メタバースのクリエイターです。女子大生です。メタバース「リアルからの解放」の創設者です。誰でも無料で入れます。【メタバースのURL】

○陽菜子の部屋（夜）

スマホに通知。

アバターの声「ひなさん。これから、第15回リアルからの解放を記念したパーティーするんですけど、来ませんか？」

○メタバースの世界（夜）

大通りに集まってくるアバターたち。

○陽菜子の部屋（夜）

陽菜子、スマホの液晶がかすんで見え

る。腹がぐーっと鳴る。

陽菜子M「何度もお腹が鳴るのに、何も食べ  
たくならない」

○同（朝）

陽菜子、ベッドの中で寝がえりを打つ。  
目を開けてスマホを押す。たくさんの  
通知。時間は朝の5時半。

陽菜子M「ぜんぜん、眠れなかった」  
1階からドタン、と大きな物音。

○廊下（階段）（朝）

陽菜子、階段を駆けおりる。  
陽子が、トイレの前でうつ伏せに倒れ  
ている。傍に車椅子。

陽菜子「おばあちゃん？」

陽子「ひ、ひな」

陽菜子「どうしたの？」

陽子「トイレに行きたくて」

陽菜子「立てる？おばあちゃん」

陽菜子、陽子を立たせようとするが、  
一人では持ち上げられない。

陽菜子「ちよっと待ってて」

陽菜子、階段を上がっていく。

○大貫の部屋（朝）

陽菜子、ノックする。

陽菜子「お父さん。お父さん」

ドアの向こうから反応がない。

陽菜子「おばあちゃん。トイレだって。お父

さん、お父さん」

ドアが開き、大貫が寝巻姿で現れる。

大貫「オマエがやればいいだろ」

陽菜子「持ち上げられないんだよ」

大貫「邪魔だ。どけ」

大貫、部屋を出ると陽菜子を押し  
のけて、光太郎の部屋の方へ行く。

大貫「光太郎。悪いな。ちよっと起きてくれ」

○1階のトイレ（朝）

大貫と光太郎、慣れない感じで陽子を

トイレの中に入れる。

陽子、顔を覆い泣いている。

陽子「ごめんね。ごめんね」

大貫「ちよつと、動かないでくれよ母さん」

陽菜子、離れたところで見ている。

○1階のダイニングルーム（朝）

陽菜子と大貫が言い争い。

光太郎と車椅子に座る陽子、部屋の入

口であたふたする。

大貫「オマエ、ほんとにできないのか」

陽菜子「できないよ」

大貫「じゃあ飯はどうすんだ」

陽子「大丈夫よ。私がやるから」

大貫「母さんはいいから。オマエがやれ」

陽菜子「なんで私なのよ」

大貫「女だからに決まってるだろ」

陽菜子「なんで女だからやるのよ」

大貫「料理は女の仕事だ。そこまで言わずな



「バカ」

陽菜子、部屋を飛び出していく。

○玄関（朝）

陽菜子、靴を出して履こうとする。

大貫、追いかけてきて、

大貫「何してんだ」

陽菜子「母さん。探してくる」

陽子「やめてヒナちゃん」

大貫、陽菜子の腕を掴むと、

大貫「バカ」

陽菜子「離してよ」

○ニュース映像（朝）

街に人がいない。パンデミックにより

増加する死者数を伝えるテロップ。

大貫の声「状況わかってんのか」

○玄関（朝）

陽菜子、腕を振りほどく。

陽菜子「痛いな。やめるよ」

大貫「このバカ」

大貫、陽菜子をひっぱたく。

陽菜子、三和土に倒れ込むと、すぐに

大貫を睨み上げ、

陽菜子「母さん、頼れる人いないんだよ。田

舎のおじいちゃんもおばあちゃんも死んで

るし」

大貫「ふん」

陽菜子「兄弟もいない。どこにも行けるとこ

がないの」

大貫「だから、バカだって言ってるんだ」

陽子「そうよヒナちゃん。晴世さんが悪いの。

自業自得」

陽菜子「スマホだって持ってないから連絡も

できないじゃん」

大貫「いらないだろ。家事だけしてりゃいい

んだから。本人も納得してる」

陽菜子「無理矢理じゃん。いっつもバカにし

て」

大貫「お前もバカにしてただろ…卑怯な奴だ  
お前は」

陽菜子「私のどこが卑怯なわけ？」

大貫「卑怯だろ。いつも自分は被害者面しや  
がって。いいか、ちよつと商売の真似事が  
できたぐらいで、社会で通じると思ったら  
大間違いだからな」

陽菜子「は？意味わかんないんだけど」

大貫「とにかく、飯はお前が作れ。いいな」

陽菜子「ふざけんな」

大貫「フツ。どんなに男言葉を使ったところ  
でな、所詮、お前は女でしかないんだよ」

陽菜子「んなこと、わかってるよ」

大貫、鼻で嗤い、階段を上っていく。

陽菜子、大貫の背中を睨む。

陽子「ごめんね。おばあちゃんの足がちゃん  
と動けば。ごめんねヒナちゃん」

### ○大貫の部屋

大貫、スーツ姿でパソコンの画面に向

かつて怒っている。

リモート会議中。

旅行代理店。売上、未曾有の乱高下。

画面には、若い男女が3名映っている。

大貫「言い訳するな。パンデミックが起きて

苦しいのはどこの会社も一緒だ」

大貫、机の下では貧乏ゆすり。

大貫「シンプルに考える。常に、今、お客様

がどうしてほしいのか。そこから自分の行

動を考えればいいんだ」

リモート会議に途中参加する白井和幸

(62)

大貫「お疲れ様です」

白井「大貫くん。お嬢さんは元気かね？」

大貫「は、はい。元気しております」

白井「昨日の取締役会でね、わが社も早急に

メタバース業界に参入することに決まった。

旅行って言うのは、ただの観光地巡りじゃ

ない」

大貫「おっしゃる通りです」

白井「しかもメタバースなら、昔の日本はお  
ろか、古代ローマだってなんだったって作れる。  
まさに現代のタイムマシンだ」

大貫「え、ええ」

白井「何よりも、そこで人と人がコミュニケ  
ーションをとれるのがいい。旅行の本質と  
はそこだよ。な」

大貫「はい」

白井「大貫くん。君のお嬢さんはうってつけ  
の人材だ」

大貫「はい。ありがとうございます」

白井「君から、お嬢さんに話せるね」

大貫「もちろんです。家族ですから」

白井「うん。頼むぞ」

大貫「承知いたしました」

白井「誰も傷つかない世界なんて、素晴らし  
いコンセプトじゃないか」

大貫「常務。ここだけの話ですが、実は、私  
が娘にアドバイスしたんです」

白井「やはりそうか。そうだろうと思ってた

んだよ」

大貫「娘の立場もありますので、御内密にお  
願いでければ」

白井「わかってる。わかってるとも」

× × ×

リモート会議終了。

白井の声「委託でかまわんから、早急にわが  
社に入ってもらいなさい。委託費は、陽菜  
子さんの希望額に極力沿うようにするから」

室内の書棚には、世界各国のリゾート  
地の写真集や資料。壁には、有名観光  
地の写真やポスター。

大貫、壁を睨みながら、

大貫「バカヤロウ。何がメタバースだ。あんな  
もんで客が満足するか。旅行屋のプライ  
ドねえのか」

大貫、大切そうにY S Jのネームプレ  
ートに触れる。

## ○陽菜子の部屋

陽菜子、ベッドの上で頬をおさえて横  
になっている。

テーブルの上にスマホ。通知が続々。

陽菜子、無反応。

### ○メタバースの世界

アバターが街を行きかっている。

2体のアバターが喋っている。

アバター1「今日、ヒナさん来てないね」

アバター2「まさか、リアルに搾取されてる  
んじゃない？」

アバター1「そんなわけないだろ」

アバター2「そうだよね」

アバター1「リアルが辛くなったら、間違い  
なくこっちに來るって」

### ○陽菜子の部屋（夕方）

夕焼けが室内に差し込んでいる。

陽菜子、布団に顔をうずめる。

陽菜子「何やってんだ。マジ。バカか。死ね。

自分」

その間も、続々とスマホに通知がくる。

○陽菜子の部屋（朝）

T・「次の日の朝」

ドアをこんこんと叩く音。

陽菜子、目を覚ますと部屋を飛び出す。

○（2階）廊下（朝）

陽菜子「お母さん」

晴世ではなく井上マリア（34）【駿河

家政婦センター】のエプロンを着用。

陽菜子「だ、誰？」

マリア「あ、はじめましてお嬢様。私、駿河

家政婦センターから派遣されてまいりまし

た井上マリアです。本日から住み込みでお

世話になります」

陽菜子、大貫の部屋を睨み、突っ込ん

でいこうとする。

マリア「あ。旦那様はランニングに」



陽菜子、立ち止まる。そして自分の見  
た目（髪ぼさぼさ）服も乱れているこ  
とに気づき、部屋に引っ込む。

マリア「朝食、ご用意しておりますお嬢様」

○ダイニングルーム（朝）

光太郎と車いすに座った陽子、食事を  
している。

光太郎、幸せそうな顔でガツガツとご  
飯を食べている。

陽菜子、入室。

陽子、陽菜子を見て、あ、となる。

光太郎、陽菜子を見上げて、

光太郎「あれ？どっか行くの？」

陽菜子、光太郎の頭をはたく。

陽菜子「いかねえよ。てか高校行け」

光太郎「休校だよーん」

陽菜子「バカ」

陽菜子、光太郎の頭をまたはたく。

陽菜子、腹が鳴る。

光太郎、笑いをかみ殺す。

陽菜子「死ねッ」

陽菜子、光太郎の頭をグーで殴る。

光太郎、殴られてもガツガツ食べる。

陽子「おばあちゃんも、知らなかったのよ。

家政婦なんて」

陽菜子「なんで、いつも何も言わないで勝手に決めるの。あの人」

陽子「ヒナちゃん」

陽菜子「マジ無理」

陽子「ほんと無責任ね…晴世さんって。家を守るのが女の務めですよ」

玄関ドアの開く音。

マリアの声「お帰りなさいませ旦那様」

大貫の声「ああ。どうも」

陽菜子、部屋を飛び出そうとする。

陽子、陽菜子の手を掴む。

陽菜子、驚いて陽子を見る。

陽子「ヒナちゃん。お願い。人様の前で怒鳴り合わないで」

陽菜子の腕から力が抜ける。

○1階の洗面所（時間経過）

洗濯籠に山盛りだった洗濯物が徐々に  
なくなっていく。洗濯機の回る音。

○2階のベランダ（時間経過）

物干しざおに洗濯物が干されていく。

○ダイニングルーム（時間経過）

シンクに汚れた食器の山。綺麗になり、  
食器棚に片付けられていく。

○陽子の部屋

マリア、陽子を車いすから介護用ベッ  
ドに戻す。

陽子「重いでしょ。ごめんなさいね」

マリア「いいえ。全然」

陽子「マリアさんは、若くって力持ちね。あ、  
女性に力持ちは失礼ね」

マリア「いえ。誉め言葉です」

### ○陽菜子の部屋

陽菜子、部屋のドアノブを掴んでひねろうとする。

部屋のテレビから流れてくるニュース映像。感染症。死者数が増えていく。

大貫の声「このバカ」

陽菜子の頬をはたく音。

陽菜子、自分の頬をおさえて蹲る。

スマホに通知。「TwitterのDM。メタバースの住人から。」

アバター「早く、新しい喫茶店作ってくださいーい」

× × ×

陽菜子、デスクに座り、VRゴーグルをつけてパソコンに向かって作業している。町の中に新しい喫茶店を作っている。傍らには、古びた写真アルバム。開いたページには喫茶店の店内写真。

陽菜子、溜息をついてGoogleを外す。  
陽菜子、スマホを取り、「Twitterのツイ  
ート画面を起動。」

○陽菜子のスマホ画面

ツイート画面にフリック入力。

陽菜子の声「母さんを探しています」

すぐ削除。

陽菜子の声「母さんがいなくなりました」

すぐ削除。DMが届く。

アバターの声「ヒナさん。いつ頃、いらっし

やいますか？みんな待ってます。まさか、

リアルに搾取なんかされてませんよね？w」

○メタバースの世界

たくさんの人が行きかっている。

○陽菜子の部屋

陽菜子、スマホの画面を伏せ、テーブ  
ルの上につ伏す。

陽菜子「何やってんだほんと。何やってんだ」

○ダイニングルーム（夜）

陽子の声「マリアさん。マリアさん」

布団を敷いて寝ていたマリア、目を覚  
ます。時計は夜中の2時。

マリア「はい」

陽子の声「トイレ。トイレ」

マリア「かしこまりました」

○（1階）廊下（夜）

マリア、廊下に出ると陽菜子に会う。

陽菜子・マリア「あ」

お互い、気まずい。

陽子の声「マリアさん。早くしてちょうだい」

陽菜子、道を譲る。

マリア、頭を下げて通り抜ける。

マリア「はい。ただいま」

陽菜子、マリアの背中を視線で追い、  
風呂場に入っていく。

○（1階）廊下

マリア、忙しなく動きまわっている。

陽子の声「マリアさん」

マリア「はい」

マリア、陽子の部屋へ。

× × ×

光太郎の声「マリアさん。おかわり」

ばたばた走るマリア。

マリア「はい」

× × ×

大貫、階段から下りてきて、

大貫「マリアさん」

マリア「はい。すぐ伺います」

× × ×

マリア、疲れた顔で戻ってくる。

陽子・光太郎・大貫「（同時に）マリアさん」

マリア、驚いた顔。

○ダイニングルーム（夜）

陽子、光太郎、大貫、夕食中。

マリア、傍に控えている。

大貫「アイツが、一番母親に頼ってたよな」

光太郎「うん。いっつも母さん母さんって」

陽子「長女だからって、晴世さんが甘やかしすぎたのよ」

マリア、啞然とする。

○（1階）廊下（夜）

マリア、お盆におにぎりを乗せて立っている。

大貫が追いかけてくる。

大貫「いいんですよ。あんな奴、ほっとけば」  
マリア「でも…」

マリア、二階を見上げる。

○（回想）大貫の部屋

リモート会議。

白井、満面の笑み。

白井「おおそうか、娘さん。委託を前向きに検討してくれると」



大貫「はい」

白井「いやあ羨ましいよ。良い親子関係だね  
大貫くんは。ウチとは大違いだ」

大貫「恐縮です」

大貫、机の下で貧乏ゆすり。

白井「うん。社長にも報告しておこう」

大貫「え…」

白井「何、謙遜することない。素晴らしいこ  
とだよコレは。わが社にとって歴史的転換  
点だ」

大貫「あ、ありがとうございます」

○元の廊下（夜）

大貫「何が歴史的転換点だ。俺は認めないぞ  
絶対」

マリア「…」

大貫「流行りもんだからもてはやされてるだ  
けなんだ。どいつもこいつも狂ってやがる。  
まったく」

大貫、うつむいてるマリアに気づく。

マリア「あの旦那様。僭越ながら、少しお嬢様とお話しになられた方が」

大貫「何で俺から。話したいならアイツから来ればいいんだ。俺はいつでも受け入れてやりますよ」

大貫、くるっと背を向けてしまう。

大貫「まあ…どうしてもアイツに食わせたいんならどうぞ、ご自由になさってください」

大貫、ダイニングルームに戻っていく。

大貫「光太郎。どうだ、高校は？あれ、そうか今は休校だったな」

### ○陽菜子の部屋（夜）

陽菜子、VRゴーグルをつけて作業。手が止まる。

陽菜子、ゴーグルを外し、机の抽斗を開ける。カロリーメイトや栄養食品がぎっしり。

陽菜子、カロリーメイトを取り出し、袋から開けようとする。腹の虫が、ま

るで陽菜子に抗議するかのよう  
にグーと鳴るが、開けずに戻す。

○（2階）廊下（夜）

マリア、陽菜子の部屋の前でためらい、  
一度、小さくノックする。

マリア「お嬢様。お仕事中、申し訳ございま  
せん」

部屋の中から反応はない。

マリア「お食事、こちらに置かせていただき  
ます」

マリア、お盆を置いて立ち去ろうとす  
ると、ドアが開き、陽菜子が顔を出す。

マリア「お嬢様」

陽菜子「あの…うーんと、なんか、なんかご  
めんなさい」

マリア「わたくしの方こそ、気配りが足りず  
に申し訳ございません。他に何か必要なも  
のございませんでしょうか？」

陽菜子「いえ。あの、信じないと思うけど、

マリアさんが嫌いなわけじゃないんです」

マリア「はい。承知しております」

陽菜子「まだ、混乱してて。母が出ていつちやって：自分のせいなんじゃないかって」

マリア「私の立場から、安易なことは申し上げられません。でも、今のお嬢様の気持ち、きっとお母様にも伝わっていますよ」

陽菜子「もう遅いよ」

マリア「え？」

陽菜子「いなくなって初めて、気づいたんで」

陽菜子、ドアを閉めようとして途中で止めると、お盆を取り、

陽菜子「ありがとうございます。いただきませす」

マリア「はい。また明日、お部屋の前にもつてまいります」

陽菜子「すいません」

陽菜子、お盆の上のおにぎりを見ている。涙が頬を伝う。

マリア、驚く。

陽菜子の声「いららないから。バカなの？」

○（回想）陽菜子の部屋（夜）

陽菜子、ヘッドセットをはめてパソコンに向かって作業している。

晴世、傍でお盆を持って立っている。

お盆の上にはおにぎり。

陽菜子、パソコンのキーを叩きながら、

陽菜子「バカじゃないの。こんな時間に炭水化物とったら、デブになるじゃん」

晴世「でも、何も食べてないから」

陽菜子「だから、なんで炭水化物なのよ」

晴世「そういうのばかり食べちゃダメよ」

陽菜子のテーブルの上には、食べかけのゼリードリンクが置いてある。

陽菜子「うるさいな。こっちは時間ないんだよ。スポンサーとの契約があんの。明日までに仕上げないとダメなのッ」

晴世「ご飯食べないと、ちゃんと栄養…」

陽菜子「（遮って）うるさいから出て行って。」

この仕事失敗したら母さんのせいだかね」

晴世「ヒナ」

陽菜子「大学に行ったことも、働いたこともない母さんにはわかんないんだよ」

晴世「部屋の外、置いとくからね」

陽菜子「ほんとしつこいな。私は、母さんみたいなの人生は絶対嫌だから頑張ってるの」

晴世「ヒナ」

陽菜子「絶対やだから、そんな奴隷みたいな人生」

晴世、ショックを受けて固まる。

陽菜子「早く出てけよ。早く」

晴世、茫然としたまま出ていく。

ドアの閉まる音。

陽菜子、溜息をつく。キーボードを叩く音が一気に上がる。

○（回想）2階の廊下（夜）

陽菜子、出てくる。

お盆の上におにぎりが置いてある。

メモが置かれている。

晴世の声「ちゃんと食べてね」

陽菜子「ばっかみたい。マジ奴隷じゃん」

○元の（2階）廊下（夜）

陽菜子、立っていらなくなる。手に  
持っていたお盆からおにぎりが落ちる。

マリア、座り込んだ陽菜子を支える。

マリア「お嬢様」

陽菜子「私、母さんに酷いことを。すごい酷  
いことを」

マリア「大丈夫。大丈夫です」

陽菜子「次の日に、母さん家を出たんです。

私のせいだ。絶対、私のせい」

マリア「お嬢様…」

陽菜子、泣きながら手を伸ばし、床に  
落ちたおにぎりを口の中に入れる。

マリア「お嬢様、お止めください」

マリア、陽菜子を止めようとするが、  
おにぎりを口の中に入れつつける。

○大貫の部屋

リモート会議中。

大貫、顔面蒼白で手元のスマホを見て  
いる。

白井「コレはほんとかね？大貫くん」

大貫「いえ、まさか…」

白井「そうだよな。そんなわけないよな」

大貫「ええ。もちろんです。Twitterの乗っ取  
りかもしれません」

白井「おお、そうか。それはそれで大変だ」

大貫「早急に調査します」

○大貫のスマホ画面

Twitter上で、トレンド上位独占。

【ひなの母、家出】

【家出 母】

【パンデミック 家出】

女子大生クリエイターとして有名なひ  
なの母親が家出したというニュース。

大貫の声「何をやってんだオマエは」



○（2階）廊下

陽菜子と大貫、怒鳴りあう。

光太郎、傍であたふたとする。

陽菜子「母さんを探してるの」

大貫「みつともないことするな」

陽菜子「何がみつともないの」

大貫「オマエは世界中に、我が家の恥をさらしたんだぞ。なんで俺に相談しない？」

陽菜子「相談？話なんてまともに聞いたことないじゃない。いっつも否定ばかりして」

大貫「それはオマエがいつも間違ってるからだろうが」

マリア、階段を駆け上がってくると、陽菜子と大貫の間に割って入る。

マリア「おやめください。お二人とも」

大貫「オマエのせいで、俺の人生めちゃくちゃだ」

陽菜子「母さんの人生、めちゃくちゃにしたじゃない」

大貫「それはお前のせいだろうが」

陽菜子「私のせい？」

大貫「そうだよ。他に何かある？」

陽菜子「父さんも、おばあちゃんだって、母

さんに酷いこと言ってたでしょ」

大貫「オマエもそうだったろうが。オマエの

そういうところがずるいんだ」

陽菜子「別に、自分だけ違うなんて言ってな

いし」

大貫「まず人を責めるだろ。いつも」

陽菜子「今は母さんの話をしてるんでしょ」

マリア「お止めください」

大貫「その生意気な口の利き方な、絶対に社

会じゃ通用しないからな」

陽菜子、何か言いかけたところをマリ

アに止められる。

大貫「俺が嫌いなら、いい加減出ていけ」

### ○玄関

陽菜子、バックパックを背負って靴を履いている。

マリアに止められる陽菜子。

光太郎、階段の傍に座りオロオロ。

マリア「お嬢様。お待ちください」

陽菜子「ほんと、自分でも何やってたんだろ  
うと思つて」

陽子の部屋から陽子の声。

陽子の声「ヒナちゃん。待つて。おばあちん  
と話しましょ？」

マリア「感染したら、死んでしまいます」

陽子の声「そうよ。若い人もたくさん死んで  
るのよ」

陽菜子、靴を履き終えて立ち上がる。

マリア「お母さま、スマホ持ってないんです  
よね？」

陽子の声「やめなさいヒナちゃん。やめて。

おばあちゃんの傍にいてちょうだい」

陽菜子、玄関ドアを開ける。

マリア「お嬢様」

陽子の声「こうちゃん。お姉ちゃん止めなさ  
い。こうちゃん。こうちゃん」

光太郎 「え？あ、うん。でも…」

陽菜子、家を出ていく。

マリア、サンダルを履いて追いかけてよ  
うとする。

大貫、階段から降りてきて、

大貫 「行くな」

マリア 「だ、旦那様」

大貫 「行くんじゃないぞ。これは業務命令だ」

マリア、三和土でうなだれる。

○街中

人通りほとんどない。

○ショッピングモールの入り口

陽菜子、入口に立っている。

陽菜子M 「母さんが、いつも来てたところ」

臨時休業の張り紙。

陽菜子、振り返る。無人の駐車場が広がっている。

陽菜子M 「母さんの人生は、ココと家の往復

しかなかった」

○メタバースの世界

アバター達が話している。

アバター1「ヒナさんのお母さんが家出？」

アバター2「リアルに？」

アバター3「どうやらリアルらしい」

どんどんアバターが集まってくる。

○陽子の部屋

大貫、困惑顔。

陽子、介護ベッドの上でわんわんと泣

いている。

光太郎とマリアもいる。

陽子「警察に捜索願を出して」

大貫「…大げさだよ」

陽子「あの子は、私の命なのよお」

大貫「母さん」

光太郎とマリア、大貫を見る。

大貫、ポケットからスマホを取り出す。

○ショッピングモール

陽菜子、スマホを覗ながら歩いている。

Twitterのリプライに続々とコメント。

男女（老若男女）の声が混ざりあう。

陽菜子を擁護するものが多いが、中には責めるものもある。

女性Aの声「お母さん、きっと戻ってくるよ」

女性Bの声「信じて待とう」

男性Aの声「被害者面するなよ」

男性Aを罵倒するリプライがはじまる。

陽菜子、Twitterのアプリを消し、メタ

バースのアプリ【リアルからの解放】

を起動。

○メタバースの世界

陽菜子のアバターが入ってくる。

他のアバターたち、いつものように近

づいてこない。遠巻きに見ている。

陽菜子「みんな、助けて」

他のアバターたち、何も言わない。

陽菜子のアバター、一步、近づく。

陽菜子「母さんがいなくなっちゃったんだ。

みんな：」

陽菜子のアバター、さらに近づく。

他のアバターたち、距離を開ける。

陽菜子「みんな」

陽菜子のアバター、立ち止まる。

陽菜子「なんだよ。なんなんだよおまえら。

最低だよ。最低だおまえらなんて」

機械音「NGワード発見。アバターを消去し

ます」

陽菜子のアバターが消える。

慌てる他のアバターたち。

○ショッピングモール

陽菜子、うなだれる。ふらふらと歩き

出す。スマホが手から滑り落ちる。

○同・中庭

店はすべて閉店。子供向けのプレイル

ームに並ぶ遊具。

陽菜子、ふらふらと歩いていく。

陽菜子「母さんごめん。母さん、母さん」

晴世の声「ひ、ひな」

陽菜子、振り返る。

遊具の隙間から晴世が出てくる。部屋

着のまま、薄汚れた姿をしている。

陽菜子「か、母さん」

晴世「ヒナ。どうして」

陽菜子「母さん」

晴世「すぐ帰りなさい。感染しちゃうから」

陽菜子、晴世に駆け寄る。

晴世、陽菜子の視線に怯えている。

陽菜子「どうして家出なんかしたの」

晴世、目に狼狽の色が浮かぶ。

晴世「ご、ごめんね。か、母さんバカで。バ

カだから」

陽菜子「母さん違うの。違うのごめんごめん」

陽菜子、晴世を抱き寄せる。

晴世「臭いよ。母さん臭いよ」



陽菜子「ごめん母さん。ごめん」

晴世「全部、母さんが悪いの。母さんが悪いの」

陽菜子「母さんは悪くない。絶対悪くない」

晴世「ひ、ひな…」

○陽子の部屋

慌てる陽菜子と晴世以外の家族たち。

○メタバースの世界

慌てるアバター達。

○ショッピングモールの中庭

陽菜子「ごめん。傷つけてごめん」

晴世「いいのよ。それが母さんだから。母さんが頑張れなかっただけなの」

陽菜子「良かった。母さんいて。ここに」

晴世「他に行くところがなくて…ずっとここにいたのよ」

陽菜子「お腹、空いてないの？」

晴世「不思議ね。全然空かない」

陽菜子「寒くない？」

晴世「全然、元気」

陽菜子「謎だね」

晴世「謎。自分でも謎」

陽菜子、晴世の手をとり、

陽菜子「行こう。母さん」

晴世「どこへ」

陽菜子「わかんない」

晴世「…家に、帰るの？」

陽菜子「もう、戻らないから」

晴世「え？」

陽菜子「もう戻らない。新しいところに行くの」

晴世「でも、どこへ」

陽菜子「大丈夫。お金ならあるから」

その時、晴世の腹の虫が鳴る。中庭に

響き渡る。

二人、顔を見合わせて笑う。

遠くからパトカーのサイレンがする。

陽菜子「行こう。母さん」

陽菜子、晴世の手を引いて走り出す。

晴世「あ、イタ」

晴世、腰をおさえてうずくまる。

陽菜子「大丈夫、母さん。腰痛いの？」

晴世「母さんはいいから、先に行って」

だんだん近づいてくるパトカーの音。

陽菜子「ダメだよ。一緒じゃないと」

陽菜子、晴世の手を離さない。

晴世「ヒナ」

陽菜子「じゃあ、隠れながらいこう」

陽菜子、嬉しそうに笑っている。

晴世、戸惑いつつも付いていく。

陽菜子「母さん。腰痛くなったら言ってね」

晴世「うん」

陽菜子「絶対言ってよ」

晴世、初めて笑う。

だんだん近づいてくるパトカーの音。

陽菜子M「やっと、大切なものに気づけた」

陽菜子、風を浴びながら晴世と一緒に

歩いていく。

(了)

参考文献

「メタバース さよならアトムの時代（集英社ノンフィクション）」

出版社…集英社

著者…加藤直人

「ミライをつくろう！ VRで紡ぐバーチャル

創世記」

出版社…翔泳社

著者：GORoman